

大北電信会社(丁林同籍)關係

REEL No. A-1172

0393

アジア歴史資料センター

大北電信會社

大北電信會社通信施設ノ敵性、斷定スル根據及之  
ニ對スル我方ノ措置

昭和一七二一四  
逓信省外傳科

「丁抹國ニ開港場ヲ有スル大北電信會社ニハ英國資本ヲ參加シ居ルモノ不詳メラル處英國資本力資本總額ノ過半數ヲ占ムルヤ否ヤハ判明セス從フテ在來ノ觀念ニ依リ資本關係ヨリ同社ノ敵性ヲ斷定スルコトハ困難ナリ

惟アニ戰爭地域ニ於ケル通信施設ノ敵性ハ單ニ資本構成ノ割合、社員數ノ色分ケ等ニ依リ判定セラルヘキモノトス之ヲ例へハ資本ノ過半數カ我國ニ屬スル外國會社力戰爭地域ニ於ケ利敵行爲ヲ爲シ居ルカ如キ場合ハ當然敵焉トシア之ヲ押收シ得ルモノトス  
海上ニ於ケル中立國籍ノ船舶力資本、乗組員等ノ割合ニ拘ラス積

船ノ敵性ニ依リ拿捕ノ對象タルカ如ク中立國籍ヲ有スル通信施設モ其ノ號碼スル通信力敵性ヲ有スル場合ハ當然被寄附ニ於ケ之ヲ押收シ得サルヘカラス蓋シ交戰國ハ通信施設ニ依ル中立國ノ利敵行爲ヲ看過セサルヘカラサルノ理由ナキヲ以テナリ  
如上ノ觀點ヨリ大北電信會社ノ上海ニ於ケル海上運用施設並ニ上海—香港間及上海—長崎—浦潮間海底線ニ之等通信施設ヘ既ニ久シキ以前ヨリ敵性國家間ノ通信一例ヘハ大東亞戰物海航上  
海—香港線ヲ通過スル上海—重慶間情報ハ一日二千通ヲ數ヘタリ  
ノ航行ノ號碼等ニ貢獻シ來リタルモノニシテ今日我方力之ヲ敵焉トシ  
ナ押收スルハ極メナ當然ノコトト言ハサルヘカラス  
更ニ大北電信會社ノ事業ノ運営ヲ見ルニ同社ハ英國系大東亞戰物不可分ノ一体トシテ英國勢力下ニ行動シ且抗日重慶政府トモ連絡  
ヲ維持シ居ルモノニシテ之ノ點ヨリスルモ同社ノ敵性ハ明瞭ナリ

次ニ之ニ關スルニ、三ノ事項ヲ擧グベシ

1、大北、大東兩者ハ東亞領域ニ於ケル事業運營上極メテ密接ニ  
提携シ

(1) 大東ノ海底線ヘ大北ニ於テ保守及修理シ  
(2) 大東ノ通信機器ヘ大北ノ上海修理工場ニ於テ修繕シ  
(3) 大北ノ機械部分品式紙等ハ概本倫敦ヨリ供給ヲ受ケ居タルノ  
ミナラズ

(4) 兩社ハ日本及支那發著電報ニ對シ共同計算制ヲ設定シ來リタ

右ノ如ク大北會社ヘ英國大東會社ト設備ノ維持ヲ共同ニシ、共  
通ノ資材ノ供給源ニ依存シ會社組織ノ根幹タル收支計算ヲモ合  
同シ來リタルモノニシテ當時大東フ通ジテ英國政府ノ指揮下ニ  
立チ久シキニ亘リ帝國對外通信ノ進展ヲ抑制シ來リタルモノナ  
リ

是昨年大北會社董事總支配人上京ノ仰我方ニ於テ同社ケーブル、  
シップノ買收方フ申入レタルニ際シ同支配人ハ上海ヲ定期港ト  
スル同社ケーブル、シップハ香港ヲ定期港トスルモノト共ニ華  
聯海軍管理下ニ香港ニ在泊中ナル旨右ノ事實ハ大北會社ガ華聯  
政府ノ指揮乃至保護下ニアルモノナルヲ證スルモノナリ  
是近年大北、大東、斯太三社ガ東亞ニ於テ有スル通信利權ノ確護  
ニ關シ遞信省ハ上海現地軍ニ對シ曉情ヲ爲ス場合ハ常ニ大北會  
社董事總支配人ガ三社ヲ代表スルヲ例トシ丁一寧、米三國政府  
ガ之ニ關聯シ帝國政府ニ交渉スル場合ハ常ニ共同戰線ヲ張リ居  
レリ  
右ノ事實ハ大北會社ハ英米利權ト連命フ共ニスルヲ物語ルモノ  
ニシテ其ノ敵性ヲ推斷スルノ一證左タルヲ失ハザルモノトス  
是大北會社董事總支配人ガ三社ヲ代表スル例トシ丁一寧、米三國政府  
ガ之ニ關聯シ帝國政府ニ交渉スル場合ハ常ニ共同戰線ヲ張リ居  
レリ

電  
信  
事  
件  
書

京政府ノ承認後モ同社社員ハ「我等ハ自由丁抹國ニ屬スルモノナリ」ト豪語シテ新政府及華中電氣通信株式會社否認ノ態度ヲ持続シ來リ更ニ大東亞戰爭勃發後ノ昨年十二月二十日同支配人ハ重慶政權下ノ要人ヨリ重慶・上海間電報ノ重慶・毛斯コ一無渠及毛斯コ一浦潮・上海泉經由取扱方ノ依頼電報ヲ接受シ居レ

右ノ事實ハ大北會社ノ東亞新秩序建設ニ對スル反抗的態度ヲ明示スルト共ニ同社ガ今猶抗日重慶政權トノ關係ヲ解消シ居ラザルヲ證スルモノナリ

以上之ヲ要スルニ大北電信會社通信施設ノ敵性ハ之ヲ通過スル浦信ノ敵性ヨリスルモ將又同社運營上ノ英國トノ連帶性ヨリスルモ充分之ヲ斷定スルモ得ルモノナル處更ニ同社ガ七十年ニ亘リ帝國ノ對外通信權ヲ喪失シ或ハ變動ト語ラヒ或ハ英米ト結ビテ帝國通信政策ノ實施ヲ阻ミ來リタル一連ノ事實ヲ想起シ且今後ニ於ケル

同社通信施設ニ依ル利敵行爲ノ可能性ヲ皆ヘ更ニ其ノ大東亞通信新秩序ノ建設上ニ及ボスベキ支障ニ想到スルトキ東亞ニ於ケル同社ノ通信施設ハ最早一日ノ存續ヲモ許容シ得ザルモノトス  
大北電信會社通信施設ノ敵性ハ以上ニヨリ明瞭ナルガ之ニ對シ我方ノ執ルベキ措置ヲ要約スレバ次ノ如クナルベシ  
〔一〕海底電信設備ハ現地軍ニ於テ之ヲ接收スクコト  
〔二〕接收ノ理由ハ前述ノ敵性フ強硬ニ一方的ニ主張シ外交交渉ニハ外務省ヲ當ラシメ外交官ヲシテ機械的ニ物理的ニ前記ノ主張ヲ接收スルコト  
〔三〕島嶼内ノ海底線モ「敵性アル法人ニ敵性アル方法ヲ以テ敵性場ニ使用ナラルト恐レアル敵性法人ノ所有スル物件」トシア之ヲ接收スルコト  
〔四〕四國ノ狀勢ヨリミテ萬止ムヲ得ザルトナハ以上ノ措置ニ對シ戰時狀態終了後多少ノ賠償ヲ爲ス旨ヲ示唆スルモ蓋文ナキセノトス

通信省工務局調査

一 同會社ノ日本ニ於ケル利權  
イ、長崎上海線、長崎浦潮線ノ布設特許

一 明治三年

ロ、朝鮮海底線布設特許

一 明治十五年

ハ、獨占権許可

一 明治四十年頃

ニ、朝鮮海底線買收

一 大正二年

ホ、我長崎上海線布設ニ伴フ修正  
ヘ、昭和十八年四月ヲ期シ會社ノ持許回収

一 昭和十五年

ト、支那政府ノ同意ヲ得スシテ布設シタル

一 一八八三年

イ、支那政府ノ同意ヲ得スシテ布設シタル

一 一八八七年

ロ、右ニ對スル正式許可

一 一九〇二年

ハ、獨占権許可（一九一〇年迄）

一 一九〇八年

ニ、上海太沽線經營契約

一 一九〇九年

外務省

(日本標準規格B5)

ホ、北京キヤタタ線經營契約 ヘ、電信借款ニ伴ヒ獨占権ノ延長 ト、南京政府ノ與ヘタル獨占権ノ延長 ニ、古イ話タカホーツマス線村ノ時日英間ノ外交打合確報サロシ ヤニ洩ラシタ例アリ ホ、東方擴張會社トノ關係ヲ調ヘル必要アリ ヘ、大北電信會社ノ社員ノ身元ヲ調ヘル必要アリ （英人、敵性支那人等ノ問題）	一一九〇二年 一一九三〇年迄　一一九一〇年 一一九四四年迄　一一九二〇年 一一九二六年十二月兩期ト其後ノ狀況詳ナラス イ、資本一ソウ、英、デンマーク等ラシイ ロ、電報ノ端ツデンマーケ、英等ニ提供セル疑アリ ヘ、從來國ノ中ニヘ東方擴張會社ノ人カ入ツテキル而アリ
---	---

大北電信會社ノ敵性判定資料

昭和一〇一〇二二

一 資本及董役ノ構成

大北會社ノ資本又ハ董役ニ敵性資本又ハ個人カ參加シ居ルヤ否ヤ又其ノ占ムル割合等ニ付百方調査シタルセ列明スルユダラス  
会社從來ノ對日態度

大北會社ハ明治四年以來帝國トノ關係ヲ持續シ來リ居レル力其ノ  
間ニ於ケル會社ノ對日態度ハ別紙ノ通ニシテ我國通信権益ノ侵害  
利益ノ壟斷、帝國通信政策ノ妨害、諜報通信ニ對スル便宜供與等  
終始反日的態度ニ出テ之カ爲帝國ノ威リタル有形無形ノ損害ハ甚  
大ナリ

二 支那事變乃至大東亜戰爭前後ニ於ケル會社ノ敵性行爲

(一) 大北電信會社ハ特ニ支那事變物發以來會社ノ東亜ニ於ケル海陸  
線施設ヲ利用シ敵性圖ニ對スル情報ノ供與、抗日重慶政權ノ培

外務省

(日本標準規格B5)

義等ニ征奔シ中立國體ヲ有スル通信權益ニ依リ利敵行爲ヲ敢テ

行ヒ來リタリ

(二) 文那事變物發以來大北會社ハ總クマテ重慶政權ヲ正當政府トシ  
國政府トノ關係ヲ堅密ニシ南京政府ノ成立、華中電氣通信株式  
會社ノ成立ニ對シテハ殊更ニ目フ較ヒ否定的態度ヲ採リ來リタ  
リ珠ニ昭和十六年八月丁抹國ノ南京政府承認後ト雖右態度ヲ改  
メスシナ大東亜戰爭ニ至リタリ例へハ會社海底線ニ依リ取扱ヒ  
タル電報ノ料金中上海首尾料ハ從來文那政府ニ支拂ヒ來リタル  
ニ供託スルコトトセルカ會社ハ丁抹國ノ南京政府承認後ト雖モ  
其ノ態度ヲ改メスシナ今日モ運リタル力加キハ其ノ顯著ナル例  
ナリトス

(三) 昭和十六年會社被東総文記入上京ヲ機會ニ開社ケーブル・シフ

外務省

(日本標準規格B5)

REEL No. A-1172

0398

アジア歴史資料センター

百萬圓ヲ有シ大東亜戦争勃發ニ伴ヒ之カ支拂フ見合セ居レルカ  
會社ハ其ノ後執拗ニ右金額ノ支拂方ヲ促シ來リ居レリ  
惟フニ右支拂金ハ單ニ大北會社ニ歸屬スヘキ料金ノミナラス其  
ノ大半ハ敵國商社タル大東、商太等へ支拂フヘキモノヲ包含シ  
居リ右大北會社ノ行爲ハ明ニ利敵行爲ト言ハサルヘカラス

乙ノ買收方折衝セルニ關シ同文配人ハ上海ヲ定期港トスル同社  
「アーブル、シンプ」ハ香港ヲ定期港トスルモノト共ニ英國海軍管  
理下ニ置カレアルヲ以テ買收ニ應シ難キ旨ヲ述ヘ居タリ  
更ニ大東亜戦争ノ進展ニ伴ヒ同社アーブル、シンプ」ハ我方ノ保  
護ヲ求ムルノ舉ニ出ナスシテシンガポール方面ニ逃避シ英國領  
障壁ニ投セリ

此等ノ事實ニ依ルモ大北會社カ英國政府ノ實質的文配下ニ在ル  
コト開ナリ

(四) 大東亜戦争勃發度後昭和十六年十二月二十日會社經東總文配人  
カ重慶政權下ノ要人ヨリ重慶上海間電報ヲ重慶「アスコー」謹無  
線及「モスクニー」通鹽上海線ニ依リ取扱方ノ依頼電報ヲ接受シ  
タリ右事實ハ大北會社カ重慶政權ト密密ナル連絡ノ下ニ我方ニ  
對スル利敵行為ヲ策シタルモノト断セサルヲ得ス

同通信者ハ大北會社ニ文拂フヘキ昨年六月以降ノ電報料支拂金約

大北電信會社ノ資本及經營方針等

(興亞院廈門連絡部調査報告書抜萃)

大北電信會社ハ丁抹ニ國籍ヲ有シ、創立當初ハ資本金四十萬磅テアツタカ、東亞進出ニ際シ之ヲ百五十萬磅ニ増資シ、更ニ十數年前二百萬磅ニ増額シタカ、其ノ後世界的不況ニ際シ昭和七、八年ニ亘リ之ヲ若干減少シ現在ハ百七十五萬七千八百十二磅十毫(昭和十四年未)トナツテキル

同社ノ財政ハ極メテ裕福テ最近數年間ノ收支ヲ見ルニ收入ハ概々百五十萬磅ニ上ルモ支出ハ六十萬磅前後ニ止マリ、年々八十萬磅ノ利益(利益率約五〇%)ヲ挙ケ、茲十數年來ニ割配當ラ持續シテ來タ、昭和十四年度ニ於テモ前年程度ノ收益ヲ收メタカ、支那事變ノ進捗、歐洲戰爭ノ勃發等ノ事情ヲ考慮シ暫行的ニ五分配當ニ止メタト謂ハレル

同社ノ資本系統ハ明瞭ヲヘナイカ、創立當初ハ丁抹國皇室ノ出資ヲ

外務省

(日本標準規格B5)

中心トシ露西亞系ノ色彩力強ク「ローマノ」王朝等モ其ノ代表的大株主テアツタカ、第一次世界大戰後帝政露西亞カ崩壊スルニ及シテソノ資本系統ハ殆ント英國ニ移リ大体總資本ノ過半數ハ英國系ニシテ是レ同社カ英國系ノ國際有線通信系ト謂ハルル所以テモアル(此ノ點ニ付鼓浪嶼大北電信局長「ノルガート」ノ言ニ據レハ「正確ニハ分ラヌカ佛、英ノ個人株主カ大多數ヲ占メテフルト思フ」トノ言ニシテ、同所テハ株主名簿ノ如キヲ所有セス)

會社ノ經營方針ニ付テ注意スヘキコトハ其ノ國籍力丁抹ナルニ拘ラス、ソノ事業運營力極メテ濃厚ナル程度ニ於テ英國色ヲ帶ヒテキルト云フ事實テアル

即チ同社ハ數十年來、本來競爭關係ニ立ツヘキ英國ノ大東電信會社(上海、香港、「シンガポール」及以西ノ海底電信線ヲ經營スル會社ニテ、英國籍國策通信會社「ケーブル・エンド・ワイアレス」會社ノ子會社ナリ)トハ極メテ緊密ナル提携フ遂ケ、日支兩國ニ於ケ

外務省

(日本標準規格B5)

REEL No. A-1172

0400

アジア歴史資料センター

ル對外通信獨占權ノ獲得及延長、既得通信權ノ擁護等ニ於テ常ニ一  
体トシテ行動シテ來タノハ勿論、通信會計ノ如キ東亞ニ關スル限り  
或ル程度共通トシ、又業務用物品、機械、器具類等ノ供給源及宣傳  
陣營ヲ單一ニシテ來タノテアル

一九〇四年（明治三十七年）米國籍商業太平洋海底電信會社（米支  
海底電信ヲ經營スル會社）テ資本金九一〇〇萬弗、本社ヲ紐育ニ置キ  
桑港カラ「ホノルル」「ミッドウェー」「グアム」「マニラ」ヲ經  
テ上海ニ至ル海底線一條ヲ所有スノ上海乘入ニ際シテハ、始メ大  
東電信會社ト歩調ヲ合セ猛烈ナル反對フナシタカ、結局同社株式ノ  
四分ノ一ヲ譲受ケ大東電信會社ハ二分ノ一ヲ譲受ケ、資本關係ヨリ  
大東電信會社ト共ニ之ヲ牛耳リ得ルニ至リ之ト緊密提携スルニ至ツ

タ  
又同社上海局ハ大東電信、商業太平洋海底電信會社ノ上海局ト共ニ  
共同租界内ノ同一建物（「ケンブルハウス」ト稱セラル）ノ内ニ事

外務省

（日本標準規格B5）

務所ヲ有シ、例ノ英國「ロイテル」通信系トモ結托シテ居リ、獨逸  
軍力丁抹本國ニ平和進駐シ、本國政府カ南京政府ヲ承認シテカラモ  
尙「我等ハ「フリーデンマーク」ノ管理下ニ在リ」等ト揚言シ、強  
ク権輿色ヲ否定シ、蘇ニ陽ニ敵性振リヲ發揮シツツアツタコトハ有  
名テアル  
殊ニ今次大東亞戰爭勃發ニ際シ、上海ヲ定繫港トスル會社ノ敷設船  
「ストア・ノルデスケ」號及「バシフィック」號カ英駆海軍ノ保護  
下ニ南方ニ遁走シ去ツタ事實ニ徵スルモ其ノ英國色ノ歷然タルモノ  
アルコトハ掩ヒ得メコロテアリ、以テ相當ノ敵性ヲ有シタルモノ  
トスヘキ一事證テアル（此ノ點ニ關スル鼓浪嶼大北電信局長「ノル  
ガート」ノ言ニ據レハ「此ノ二隻ハ大東亞戰爭勃發前、既ニ大東電  
信會社ニ傭船セラレテ居タモノテ、大北電信トシテ此ノ行動ヲ執ツ  
タモノテハナイ」ト暗ニ辯明的言辭ヲ弄セルカ現在既ニ一隻ハ駁沈  
セラレ一隻ハ濠洲近海ニ在ル由ナリ）

外務省

（日本標準規格B5）

REEL No. A-1172

0401

アジア歴史資料センター

スクリノ如ク大北電信ハ丁抹ノ國籍ヲ有スルモ其ノ資本ノ大半ハ英國  
系統ニ屬シ、英金融資本ノ傀儡トナリ、列強ノ政治的干渉ノ少イ中  
立國籍ノ假面ノ下ニ、本來ナラハ英、米ノ同業會社トヘ競争關係ニ  
アル間柄ナルニ拘ラス、彼等ト渾然一体ヲ爲シ、相携ヘテ「アング  
ロ・サクソン」通信政策ノ御先棒ヲ勤メツツタモノデアリ久シ  
キニ亘リ、東亞ニ於ケル國際通信権ヲ壟斷シ、巨利ヲ貧リ來タツタ  
ノテアル

外務省

(日本標準規格B5)

會社從來ノ對日態度

昭和二年三月

丁抹國大北電信會社ハ舊國政府ノ特許ニ基キ明治四年以來浦賀及上  
海ヨリノ海底線ヲ敷設ニ施設シ之ヲ運用シテ我國外電信ヲ取扱ヒ來  
リタルモノナルガ右權益ハ我電信事業政府專掌主義ノ唯一ノ例外ニ  
シテ我通商界ニ宛然租界的存在ヲ爲シ英米系諸國通信網ヲ背景トシ  
七十一年久シキニ亘リ我對外通信ヲ堅拒シ來リタルモノナルガ開港  
ノ存在ニ依リ我國ノ對外通信上、中國上級リタル損害ハ極メテ大ナ  
ルモノアリ其ノ重要ナルモノヲ擧ダレバ左ノ如シ

一 日清戰役後我國ガ台灣ヲ領有スルニ及ビ明治三十一年淡水川河口  
開港應機ヲ買收スルニ當リ會社ハ其ノ有スル獨占權ヲ風ア暴擧テ  
權ヘ結局本據ニ倣リ取扱フ通信ハ台灣文部國通信權ニ限冠スルノ如  
ニ貿易買收交渉ヲ爲シタルセ會社ハ之ニ應ゼ又軍事外交上著シカ  
不利不便ヲ蒙リタリ

一 日清戰役後我國ガ台灣ヲ領有スルニ及ビ明治三十一年淡水川河口  
開港應機ヲ買收スルニ當リ會社ハ其ノ有スル獨占權ヲ風ア暴擧テ  
權ヘ結局本據ニ倣リ取扱フ通信ハ台灣文部國通信權ニ限冠スルノ如  
ニ貿易買收交渉ヲ爲シタルセ會社ハ之ニ應ゼ又軍事外交上著シカ  
不利不便ヲ蒙リタリ

電 氣

ムナク水年日本本土福州間通信ノ如キハ我方ニ不利ナル會社ノ長崎上海線ヲ經由セシムルノ外ナカリシ次第ナリ

大正三年我國ニ於テ長崎上海間海底線ヲ敷設スルニ當リ會社ハ其ノ有スル獨占權ニ依リ寄酷ナル條件ノ下ニ之カ敷設ヲ承認シタリ即チ我方ノ長崎上海間海底線ニ依リ取扱フヘキ通信ハ我國ト上海トノ間ニ發着スルモノニ限定シ而モ帝國政府官報ノ外ハ歐文電報ノ取扱ヲ認メス和文電報ノ取扱ノミニ制限セラレタルノミナラス會社ニ對スル權利金トシテ本線ノ通信料金ノ約三分ノ一ヲ支拂ハサルヲ得サリシ次第ナリ

右權利金ハ日支間ニ於ケル他ノ海底線ニ付テモ同様會社ニ對シ支拂ヒ來リタルモノナルカ之ニ依リ會社ノ博タル所得ハ昭和五年合併計算義務ノ終了ニ至ル迄ノ十數年間ニ於テ二千萬金フラン（約二十五百萬圓）ニ上リ居レリ

會社ハ以上ノ外其ノ利權擁護ノ爲帝國政府ヲ幸劇シ又ハ抗議ヲ提出スル等策ヲ用ヒ我國對外通商政策ノ根幹タル低料金政策ニ依リ

外務省

（日本標準規格B6）

電 氣

從來僅下交渉ヲ試ムルモ容易ニ之ニ應セス、我對外無線事業力漸次極東、南洋、歐洲方面トノ連絡ヲ開始スルヤ免許狀ニ依リ保護セラレタル會社利益ノ侵害ナリトシテ抗議ヲ提出シ、大正十三年乃至十五年間ニ日本政府ヨリ受ケタル關貨支拂ニ對シ關貨下落ニ對スル損害二百六十萬圓ヲ外交交渉ニ依リ要求シ來リ、長崎會社ニ於ケル營業收益ニ對スル課稅ヲ不當ナリトシテ數年ニ亘リ訴訟ヲ以テ争ヒ又輓近我國海外拂節約ノ國家的運動ノ一環トシテ外交機ツツアル電報ノ無線利用方強調ヲ國際規則違反ナリトシテ外交機關ヲ通シ英國ト相携ヘ抗議ヲ爲ス等執拗ナル態度ヲ以テ權益擁護ニ狂奔セリ

大北電信會社及之ト連絡スル英國、大東會社ハ我國ノ對外直通無線回路ノ設定ヲ極力阻止シ英國亦之ニ同シテ香港、漢口、南阿聯邦等我國多年ノ提案ニ耳ヲ掩ヒ既成ノ海底線勢力ノ維持ニ努メ我國ノ無線ニ依ル對外通信自主權ノ伸張ヲ阻ミタリ

外務省

（日本標準規格B6）

0403

REEL No. A-1172

アジア歴史資料センター



(昭一八、一、一四 條二)

大北電信會社通信施設ニ關スル件

一 會社或ハ其ノ通信施設ノ敵性ヲ斷定スルノ根據ナシ  
二 従テ本件ハ會社トノ話合ニ依ルコトトスルヲ最モ妥當ナル行キ方  
トスベシ

(日本標準規格B6)

六 會社ハ我國ニ於ケル對外無線通信ノ發達ニ伴ヒ勸誘員ヲ配置シ海  
底線利用ノ宣傳事務ニ狂奔セシムルノ外或ハ政府ノ無線事業ヲ中  
傷シ或ハ利用者ノ款ヲ買フ爲勸誘員ヲ介シテ金錢物品ノ贈與ヲ爲  
シ又ハ免許狀ニ嚴禁セラレタル公衆トノ直接取引業務ヲ爲ス等最  
近會社ノ不法不信行爲ハ實ニ目ニ餘ルモノアリタリ  
七 更ニ之ヲ國家總力戰下ニ於ケル國家防衛上ノ見地ヨリスレハ我國  
内ニ外國電信會社ノ存在スルコトハ國家ノ機密保持上寔ニ深憂ニ  
堪ヘサル所ナルカ近クハ支那事變ニ際シ當省ハ關係方面ト緊密ナ  
ル連絡ヲ保チ國家機密ニ亘ル情報通信ノ檢閲ヲ施行シ居ルユ不拘  
幾多重要事項力外國ニ洩レ又「二六事件」ノ如キハ直ニ通信ノ停止  
ヲ爲シタルニモ不拘米國ノ新聞ニ掲載セラレ外國ニ相當情報流布  
セラレタルカ如キ同社ノ行動ニ付テハ幾多危惧スヘキ事象アリタ  
リ

卷之三

「ソ」聯邦政府ハ帝政英國政府ノ與ヘタルト同様ノ讓許フ大北電  
氣會社ニ許與シ居レル處本該許ノ內容トスル處ハ同會社ニ對シ認  
可頃據フ通シ歐羅巴諸國ト日本及支那トノ通便ヲ行フ上ニ必要ナ  
ル諸種ノ便宜ヲ與ヘントスルニアリ「ソ」聯政府カ同會社ノ施設  
ニ關シ何等力ノ權利ヲ有スルモノニ許サルフ以テ我方ニ於ア同會  
社ノ所有ニ力カル長崎諸港開港處電線ヲ切斷スル場合ニモ純然律  
的ニヘ「ソ」聯政府ヨリ其ノ權利ヲ侵害セルセノトシテ抗議シ來  
ルノ根據ナキモノトス惟シ「ソ」側カ從來日本及歐羅巴トノ通便  
聯絡ニヨリテ得居タル實際上ノ利益ヘ侵害セラルコトナルフ  
以テ此ノ點ニ關シ我方ニ抗議シ來ルコトアルヘキベ豫想シ得ル處

外務省

(日本語翻訳版用)

順治十八年一月十號

卷之三

外務省

(日本標準規格 B)

(昭一八二四集二)

大德重使會社送假旗鼓

一會取引ノ其ノ過信加熱ノ傾向ヲ警戒ナム  
云從テ本件ヘ會社トノ話合ニ依ルコトスルヲ最モ安當ナル行キ方

焉然レ共諸般ノ關係上右ガ事實上實行不能ナリトセバ國家總動員法ニ依リ徵用スル等少々其國內法上合法的ナシ乎横ニ依ルコト然ルベシ

卷之三

**REEL No. A-1172**

0 4 0 5

アジア歴史資料センター

同種底盤切削実施ノ方法ニ關シテ本機バレハ強力方ハ會議ノ背後ニアリテ實機ニヘ大北會長ヲシテ切削セシス底ハ鋼板ノ銀トセナ大北會長ノ同意ヲ得タル後機方ノ學ニ照事テ切削スルカ頃キ銀川機業者ハ「ソ」聯名ノ抗議書面ノ頭題ノ題字ナキ事ニテ前「ソ」國領上層メテ運マシク運シ如何ニシテモ大北會長ノ同意ヲ得顧キ時「底ハ同案セサルベキヨト御願ニ難解シ極ム時一ヘ底ワ得ヌソ」御ニ前ノ通報ヲ聞サヌシテ我方タチ手ニヨリテ一方的ニ風申公然ト之ヲ御願シ「ソ」機ノ提出シ來ル所キ抗議ニ關シテハ國領底板ノ頭内底上ノ銀ト同キ底面又風テ前抗スル事實ト又、底板銀切削ヲ實行ニ資機スル機ニ關シテ如何ナル方法ニ關ル事何レ「ソ」機ニ接知セサルルヨリハ底ケ銀カルヘク風ツノ斯ル場合國領ノ頭「ソ」交渉ニ於テ我方立場ハ甚ク不利益トナルヘキラ風ナヨ「ソ」國領カ底面又底面を底ルタガキヤ念地ノ機會ニ於テノ外ヘ銀ル非常ノ手段ヲ取ラサセテ可也

ナリ  
斯ル「ソ」個ノ抗議ニ對シテ我方カ國際法上或ハ國內法上然ル可ナ理由一總務員決ニヨル第「ソ」舉ヶテ論證スル場合ハ日「ソ」銀ノ現狀ヨリ判斷シ本件ハ其ノ銀兩國間通案トシテ大ナル易科フ見スレテ推移スヘニ公算多シ  
但シ最惡ノ場合ヲ豫想スレハ中立國權全ニ對スル我方ノ斯ル態度ヲ指ニトリ「ソ」個ニ於テ我カ對「ソ」利權特ニ現在苦タシク不安定ナル状態ニアル石炭、石油ノ開拓權ニ對スル歸還ヲ國化スルコトナキヲ保セス

支那我方力國際法上或ハ國內法上然ル可キ理由ヲ以テ切斷スル場合ニモ事前ニ之ヲ「ソ」側ニ通報スルハ徒ニ事態ヲ紛糾セシメ反テ目的達成ヲ困難トシ且ツ防禦上ノ關係モアルヘク適當ノ方法ニアラス

外務省

(日本標準規格B6)

現在ノ國情勢ヨリシテ左シテ重要ナラサル問題ニ關シテ日「ソ」關係フ紛糾セシムルコトハ成ル可ク邇ケ度キ意圖ナレハ本件ニ關シテモ長崎・浦潮間海底線フ切断セシシテ大北會社所有ニ係ル他ノ海底線一例ヘヘ長崎・上海線ノ如キーフ使用スルコト望マシク他ノ方法ナク止フ得ス本件フ實施スル場合ニモ其ノ方法ヘ前述ノ如ク公然ト且ツ正當ナル理由ヲ以テ行フフ可トス  
然シテ我方トシナハ右ニ對スル「ソ」側ノ出方ニ對シテ前述セル如キ其ノ最悪ナル場合フモ考慮シテ對策フ準備シ置ク必要アルヘシ

外務省

(日本標準規格B6)

REEL No. A-1172

0409

アジア歴史資料センター

日本帝國遞信省ヨリ丁抹國有限公司責任大北電信  
會社ニ附與シタル千九百四十年五月四日附特  
許狀

「假譯文」

千九百十三年八月二十三日附フ以テ日本帝國政府ヨリ有限責任大北  
電信會社一以下會社ト稱スニニ附與シタル免許狀ハ根本的修正ヲ必  
要トスルニ至リタルヲ以テ又

遞信省一以下遞信省ト稱ス一ヘ一定期間ヲ限り會社ニ現在海底線ノ  
日本領域内ニ於ケル陸揚ノ繩索ヲ承認スルコトニ同意シタルヲ以テ  
又  
遞信省ハ前記期間中會社海底線ノ長崎端ヲ運用シ且會社海底線ニ依  
リ國際電報ヲ取扱フコトニ決定シタルヲ以テ  
遞信省ハ上記ノ免許狀ニ代ルモノトシテ茲ニ特許狀ヲ會社ニ附與ス  
特許ニ關シ遵守セラルヘキ條款左ノ如シ

第一條

外務省

遞信省ハ會社ノ所有スル其ノ現在海底線四條一即長崎上海間二條及  
長崎浦鹽斯德間二條一一千九百四十三年四月三十日迄引渡キ長崎附  
近ニ陸揚スルコトヲ承認ス

前項ノ海底線ノ長崎端ハ遞信省ニ於テ之ヲ運用スヘタ、之力爲會社  
ニ屬シ日本國領域内ニ存スル繩テノ地下線、繩物、機械、設備等ハ  
之ヲ遞信省ノ管轄ニ移シ且之ヲ無償ニテ遞信省ノ用ニ供スルモノト  
ス海底線ノ運用方法ニ付テハ遞信省會社間ニ協定スヘシ  
北緯三十三度二十分以南及東經一百二十八度十分以東ノ區域ニ於ケル  
上記海底線ノ維持ハ遞信省ニ於テ其ノ費用ヲ以テ之ヲ行フモノトス  
第二條

前該ノ海底線ヲ經由シ取扱ヘルヘキ通信ノ範囲及遞信省ニ歸屬スヘ  
キ收得分ニ付テハ契ニ遞信省會社間ニ協定スヘシ

第三條

日本國政府ノ電報ヘ通常又ヘ應讀電報ニ對スル現行料金ノ半額ヲ以

外務省

(日本標準規格B5)

(日本標準規格B5)

REEL No. A-1172

0408

アジア歴史資料センター

テ曾社ノ線上之ヲ傳送スヘシ

第四條

總テノ國際電報ハ遞信省曾社間ニ別ニ協定スル場合ヲ除クノ外總際電報連絡約及同該約附屬規則ニ依リ之ヲ收扱フヘシ

第五條

曾社ノ海底線ヲ經過シ日本國各地ニ變著スル递信省曾社ノ線ノ何レカヲ通過シ曾社ノ海底線ニ變者スル递信ニ關シテハ曾社ノ海底線ノ料金ハ遞信省ノ許可ナクシテ現行所定額ヲ超ヘテ之ヲ増加スルコトヲ得ス

第六條

曾社ハ自ラ又ハ其ノ代理人又ハ副代理人ヲ介シ日本國ニ於ケル公衆ト直接取引ヲ爲スコトヲ得ス

第七條

曾社ハ遞信省ノ同意ヲ得タル後ニ非サレハ本特許狀ノ権利ヲ實行ス

外務省

(日本標準規格B5)

ル爲其ノ地位ヲ繼承スヘキ第三者ヲシテ自己ニ代ラシムルコトヲ得ス

第八條

曾社力前ニ掲ケタル條件ノ何レカニ違反シ若ハ疏虞懈怠ニ依リ之ヲ遵守セサルトキハ遞信省ハ本特許狀ヲ撤回スルノ權ヲ有ス但シ遞信省ハ曾社ニ警告ヲ爲シ且曾社力遞信省ノ畫面ニ依ル通告送達後三月以内ニ之ニ從ハサル場合ニ非サレハ特許狀ヲ撤回セサルモノトス

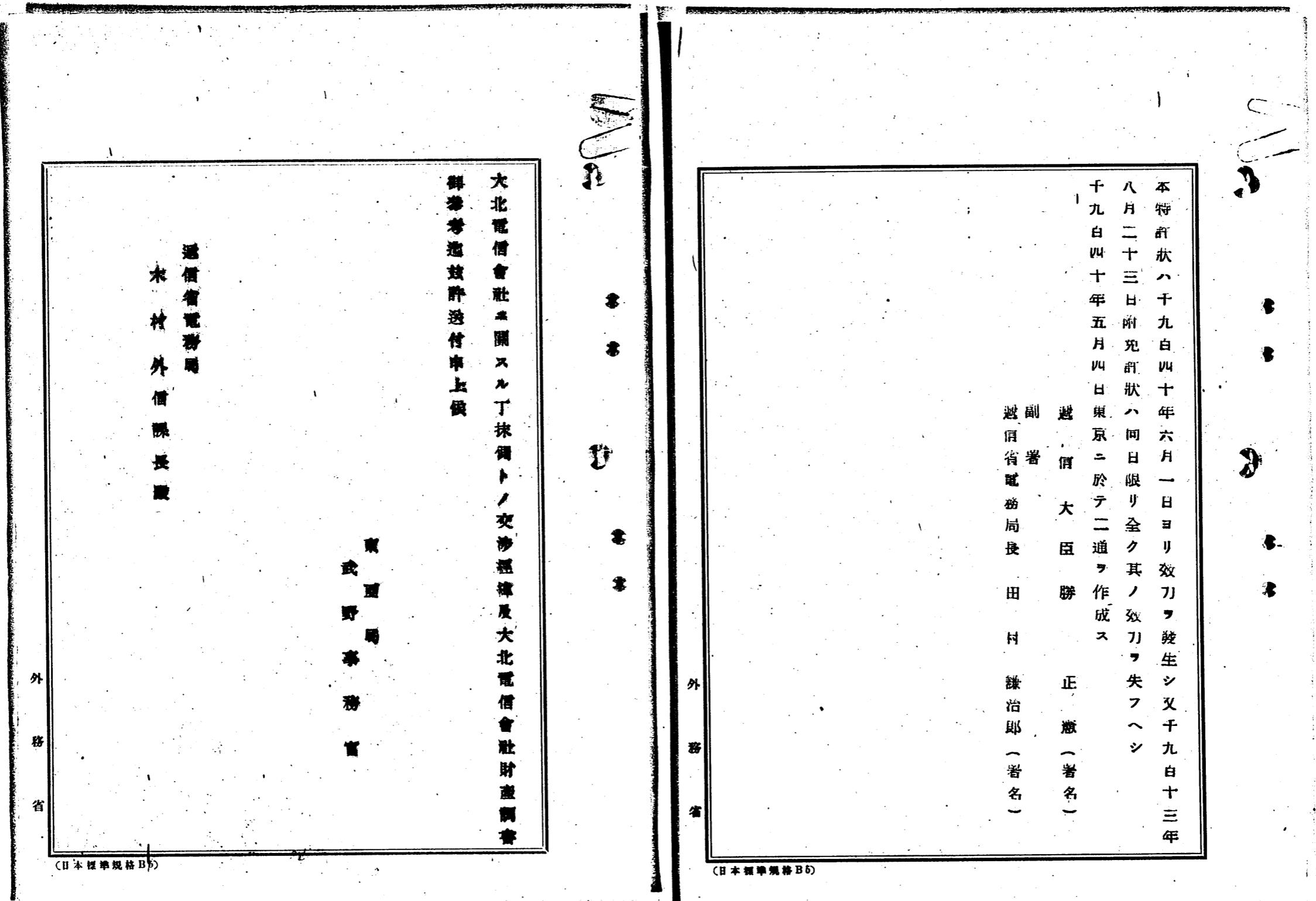
第九條

第一條ノ期間滿了シタル場合又ハ第八條ノ規定ニ依リ特許狀力撤回セラレタル場合ニ於テハ曾社ハ遞信省ノ領海ヲ含ム内ニ於ケル曾社ノ機器及附屬設備ニ海底線ヲ撤收スルヲ期ス三月経過スルモ尚撤收力行ハレサルトキハ遞信省ハ曾社ノ資機ニ於テ之ヲ撤收スルヲ得ルモノトス

第十條

外務省

(日本標準規格B5)



REEL No. A-1172

0410

アジア歴史資料センター

別紙第一

大北電信會社ニ開スル件

「昭和十六年十二月八日本軍ノ共同租界進駐ト共ニ「エドワード」  
七號艦ニ在ル大北電信會社ノ通信機材及事務所ハ英系大東、華系  
太爾社ト共ニ帝國海軍ニヨリ封印セラレ海庭「ケーブル」ヘ異  
港揚地點ニ於テ帝國陸軍ニ依リ切断セラレタリ十日午後ニ至リ  
大北ノモハ機材及事務所ノ兩脚ヲ解除セラレシモ其ノ業務ヘ引継  
キ停止セシメラレタリ

十二月十三日同社經東支配人「ボトルゼン」ヨリノ依頼ニ依ル趣  
又以テ在上海丁株園總領事ヘ眞館ニ附シ帝國海軍ニ依ル被押解取  
ニ附スル監造費事務々今後ニ於ケル可及的速力ナム業務再開時旋  
方車入レ來ルト共ニ更ニ日本内地ニ於テ同社ノ園舎ニ開シ名ベ丁  
株園ニシテ實ヘ英國籍ナリトノ疑達アル經ナルモ同社ヘ被然タル  
丁株園ナル質附言セリ

(日本標準規格B5)

第一方軍管局ヨリ太東、南太爾社ノ會計監督官タル堀山聯ニ門フ通  
シ大北ノ職員及使用人ノ「リスト」提出方要求セルニ附シ  
十二月十七日及十八日附ニテ「ボトルゼン」ヨリ堀山聯、華人  
職員使用人及被寄關係丁株人氏名等ヲ通報アリタルカ同審前高ハ  
丁株園總領事ヨリ當館宛送候函セリ  
以上ノ狀勢ニ不安フ感シタル丁株園總領事ハ十二月二十日曾禱領  
事ヲ來訪大北カ英國籍ナリトノ事跡論述ニ關シ  
昭和十四年五月四日既ニ在庫丁株園公使ヨリ外務省井上武藏副  
ニ説明シタル所ナリトテ

(1)同社ノ經營ハ金タ丁株人ニ依リ行ヘレ居ルコト  
(2)同社ノ英國人株主ハ極メテ少數ニ過キナルコト  
(3)同社ノ投資ハ丁株ノ股票及資本ニ關シ爲サレ居ルコト  
(4)同社ハ他ノ電信會社ト協力關係アルモ根拠ナル會社ニモ該屬セ  
アルヌト

外務省

(日本標準規格B5)

REEL No. A-1172

0411

アジア歴史資料センター

等フ述ヘ同社ノ中立性ヲ主張セリ

ニ之ヨリ先當納ヨリ本省ニ對シ大北社措置ニ關シ請願シタル處昭和十七年一月二日左ノ通同訓アリタリ

(1) 同社ノ資產內容ハ現在各方面トモ連絡ノ上調査申ナルモ末タ結論ニ達セス

(註) 右ノ點ニ關スル我方ノ問合ニ對シ四月二十二日丁抹側

同社總資本金三六〇〇〇〇〇〇〇「クローネ」中英人所有株ハ四八〇〇〇〇〇〇「クローネ」ナル旨回答越セリ但シ本省

ハ右丁抹側回答ヲ其ノ體信用ヘシ居ラス

(2) 然レ共防牒上及將來ニ於ケル我方ノ同社買收ノ爲ニモ同社ノ業務再開ヘ認メス而シテ斯ル業務停止ハ占領軍タル日本軍ノ通信

機材押收權ニ基ク合法的措置ナリ

(3) 更ニ今後大北所有機材ヲ軍管理ノ形式ニテ使用スル必要生スルトキハ作戦上ノ必要ニ基ク軍管理ノ形式ニテ管理使用ノ補償等

外務省

書  
書

電  
信

ハ戰後一括調整スルコトトスヘク其ノ旨ハ丁抹側ニ通告スヘシ  
(4) 右ノ軍管理ニ關シ遞信省側意見トシテハ軍ノ直接管理ヲ希望スルモ然ラザル場合ハ管理者トシテ成ルヘク華中電氣通信ヲ通ケ度シ

大一月十四日ニ至リ丁抹國總領事ハ壇内總領事ニ對シ前記四事項ナレタル内容ト同遞旨ノ書翰ヲ送付シ來リ同社ノ中立性ヲ主張スルト共ニ現在ノ狀勢下ニ必要ナル如何ナル制限ニ不服スル事以テ業務開許可方更ニ要望越セリ  
大東京ニ於テモ大北社ニ關スル交渉繼續セラレ一月十日及二月三日在京丁抹國公使ヘ外務省宛同社ノ業務再開ノ申入レフ為シナリ有ニ對シ外務省ニ於テ二月十二日附フ以テ大北電信ニ關スル今四ノ措置ヘ「ハレダ」陸戰條規第五十三條第二項及占領軍タル日本軍ノ資格ニ基づき合法且不得已ル事ノナル旨回答セリ  
大然レ處二月二十五日ニ至リ大北電信代表者六大阪、商太兩社代表

外務省

(日本標準規格B5)

(2) 今後軍派遣ノ會計監督官ノ指示命令ニ從フヘキコト  
右ニ關シ丁株國總領事ハ三月五日附ヲ以テ本國政府ノ調合ニ基ク  
通ツ以テ丁株精タル大北電信力他ノ敵性調査ト同一ニ取扱ヘラ  
ルコトニ對シ抗議シ來レリ

(2) 依テ當館ニ於テハ陸海與各關係方面ニ對シ書面ヲ以テ左ノ如ク事  
送レリ（本年三月十三日附堺内總領事發與運輸事中連絡部次長登  
場隊參謀長、方面艦隊參謀長宛軍務第一〇七號公信秘照）

(1) 二月二十五日附異國院申波ニ關シ當方ヨリ除外方事前ニ在シシ  
置キタルニ拘ラス誤解ニ依リ大北ニ關シチモ敵性國社ト同様ニ  
行ヘレタリ

(2) 同社ニ付テハ未タ敵性ナルコトヲ立證スヘキ確タル根據無キヲ  
以テ一應惟ノ敵性國社トヘ別個ニ取扱フヘキコト

(3) 今後同社ノ通信機材押収使用ニ至ルコトアルヘキモ其ノ際ハ  
前ニ丁抹練領事側ニ通告スルコトト致慶キコト  
右使用回収ノ際モ同社ノ金収殊ニ財務等ニ關シアハ之ヲ中立  
社トシテ取扱フヘキコト

十 東京ニ於テハ三月四日在京丁公使ハ西次官ヲ訪問開次官ハ次ノ  
如キ談話ヲ行ヘリ

(1) 大阪電信ノ通信遮断ハ車ノ必要ニ基ケルモノニシア現在ノ所業  
務再開ハ不可能ナリ

(2) 我方ニテハ同社機材ノ押収使用ヲモ考慮中ナルカ其ノ際ハ我方  
トシテハ損害補償ヲ行フヘシ

(3) 本問題解決ノ爲在上海日丁兩國總領事ノ會見方斡旋スヘシ  
十一 他方我方トシテハ明確ニ同社ノ通信機材及修理工場ヲ押収シ全  
後ノ我方ニ依ル使用ニ備ヘントノ結論ニ達シタルモ敵性商社トハ  
一應別個ニ取扱ハントスル趣旨ヲ以テ豫メ三月十八日附書翰ヲ開

外務省

ア今後日本軍當局ニ於ナハ同社ノ通信機材ヲ軍事上ノ必要ニ依リ押収使用スルコトアルヘキセ右ハ同社ヲ敵性ト認ムルモノニ非サルコトヲ丁抹總練習軍部通知セリ

而シナ同社ノ事務所ヲ除キ通信機材及修理工場ニ到シ三月十九日再ヒ封印ヲ行ヘリ但シ同社ハ中立性商社トシア曾計監督官ハ派遣セラレ居ラス

丁度三月二十六日本省ヨリ同社ノ在上海財産ニ感シ其ノ内容及見積價格ヲ調査スヘチ監訓令アリタリ、當館トシアハ興亞院遞信班ニ依頼シ陸海軍ノ協力ヲモ得テ現ニ調査中ナルカ海底電線及通信機材共ニ既ニ三、四十年ヲ経過シ居リ原價ハ優ニ償却シ居ルモ手入無キ爲今後尙使用可能ノ現状ナリ

十四年四月十四日丁抹總領事ハ本國政府ヨリノ訓令ニ依ル趣ヲ以テ

(1) 上海協同租界ハ占領地ト見做シ得サルコト  
(2) 大北社ハ事業開始ヲ許サルレハ日本軍當局ノ命スヘキ如何ナル

外務省

(日本標準規格B5)

條件ニモ服スヘキ意圖ナルニモ不拘同社機材ヲ押収スルヘ不當ナリ

トノ申入アリタリ同時ニ東京ニ於テモ丁抹公使ハ大臣ト會見シ右ト同趣旨ノ申入ヲ爲シタルカ奉省ノ本件ニ關スル意圖次ノ如シ

(1) 大北電信會社ノ處理方針ヘ既ニ決定シ居レハ丁抹側ノ要求ニ應シ得ス

(2) 値シ上海香港ニ於ル同社從業員ノ生活ニ對シナヘ出來ル限り便宜ヲ與フヘシ

(3) 我軍ニ依ル同社機材使用ニ付サヘ日本側ノ負フヘキ債務ニ付キ一定ノ限度アルヘキモ法律上必徴トスル範圍ノ補償ニ付テヘ堪能スヘシ

大北電信押収措置ニ關シ東頭局長ヨリ丁抹公使ニ手交セル書翰左ノ如シ

六月三十日丁抹公使ノ來訪ノ成メ東頭局長ヨリ別紙ノ通書翰ノ

外務省

(日本標準規格B5)

REEL No. A-1172

0415

アジア歴史資料センター

交付シ右ハ我方ノ「チニット」ノ見解ナル旨フ附西ナリ右ニ

對シ丁拵公使ヨリ賠償ノ問題提起セルカ局長ヨリハ既ニ大臣ヨ

リモ申述ヘタルカ如ク國際法ニ認メラル範圍内ノ義務ヲ固遂

スルモノニ非サル旨ヲ答ヘタリ

十四 大北社ニ對スル現在ノ措置次ノ如シ

(1) 同社ノ通信機材及修理工場ハ封印セラレ居レリ

(2) 事務所ニ付テハ何等措置シフラス

(3) 會計監督官ハ派遣シ居ラス

外務省

(日本標準規格B5)

外務省

(日本標準規格B5)

同書取扱會社は國公使ヨリ書面取ノ行爲ハ上海共開港界方「オ  
ナーベイド・エキマー・アリトリー」ト標シ得タルフ候サ「ハーバ  
埠約港界規則第十三條第三項ノ規定ニ照應アリトシ且其間會談方  
域内航行ヲ許サルルニ致テハ日本側ノ如何ナル指圖ニモ附載セント  
スル並アルニ拘テ又指圖裏ノ押款ヲ照應スルヨトベ「ハーバー」係員  
ノ指揮ニ及スル旨前記ハ極度リテモ屬香港政府ハ指圖取ハ止無力固  
得ヘク今次ノ相談指圖セ「ハーバー」協約國際規則第十三條第三項  
ニ依リ得ヒ屬ルモノナリトノ立場ヲ堅持シ獨特シ居ルモノニシテ是故  
指圖上ノ要點カ幾ヶ所ヨリ本埠收納港セ本埠領セラレ得可ヤセノト思  
考致スモノニ有立候

被具

大北電信會社ノ特許狀ニ就テ

大北電信會社ハ明治三年八月二十五日（西曆一千八百七十年九月二

十日）帝國ト丁抹國トノ間ニ締結セラレタ海底線陸揚免許約定ニ

ニ

底電信線ノ陸揚權ハ去ル四月三十日ヲ以テ消滅スルニ至ツタ。此ノ機會ニ我國通信事業ニ於ケル唯一ノ外國權益トシテノ同社ノ七十有餘年ニ亘ル歴史ヲ回顧シテ見ヨウ。

二 大北電信會社ハ明治三年八月二十五日（西曆一千八百七十年九月二十日）帝國ト丁抹國トノ間ニ締結セラレタ海底線陸揚免許約定ニ此ノ約定ニハ外務卿及外務大輔ト丁抹使節トガ署名シテ居ルニ依リ初メテ横濱及長崎ノ兩開港ニ海底線ヲ陸揚シ且右兩港ノ間ニ九州及四國ノ南方ヲ廻ル海底線ヲ敷設スルコトニ付日本政府ノ免許ヲ受ケタ。コレニ基イテ同社ハ長崎上海間及長崎浦潮斯德間ニ各一條ノ海底線ヲ敷設シコレヲ長崎ニ陸揚シタ。併シ横濱ノ方ハ遂ニ實現ヲ見ズ右ノ約定ニ代ツタ明治十五年ノ免許狀ニ於テハ既テ居ルコトデアル。

外務省

（日本標準規格B5）

外務省

（日本標準規格B5）

REEL No. A-1172

0416

アジア歴史資料センター

REEL No. A-1172

0410

アジア歴史資料センター

右ノ約定ハ海底線成就ノ年ヨリ三十年間有效ト言フコトニナツデ  
居タノデアルガ、其ノ満期前即チ明治十五年十二月二十八日ニ前  
ノ免許ヲ改~~テ~~擴張シタ新免許狀（此ノ免許狀ニハ工部卿及電信局  
長ガ調印シ更ニ此ノ免許狀ヲ承諾スル旨ヲ記載シテ大北電信會社  
ノ代表者ガ之ニ署名シテ居ル）ガ賦與セラレタ。此ノ免許狀ハ  
大北電信會社ニ對シ同社ガ從前長崎ニ陸揚シテ居タ海底線二條  
即チ長崎上海間及長崎浦潮間各一條ニ更ニ一條ヅツ増設シ且政  
府ノ電線ト連合通信スルコトヲ免許スルト共ニ、同社ガ朝鮮國政  
府ヨリ釜山港ニ海底線ヲ陸揚スルコトヲ許可セラレタル場合ニハ  
九州西北海岸カラ釜山近傍迄海底線ヲ敷設シ其ノ間壹岐對~~島~~ノ二  
島ニ同線ヲ陸揚スルコトヲ免許シテ居ル（此ノ朝鮮海底線ハ明治  
四十年頃我國ニ依リ買收セラレタ）。

更ニ此ノ免許狀ハ明治三年ノ免許約定ト異リ大北電信會社ニ一定  
期間ノ獨占權ヲ與ヘテ居ル。即チ同免許狀第六條第一項ハ「日本  
政府ハ此特許ヲ讓與スルノ約定締結ノ日ヨリ向二十箇年間ハ日本  
帝國ト亞細亞大陸及ビ其近傍ノ島嶼（日本政府ニ屬スル者ハ勿論  
除キ）譬へハ台灣香港呂宋群島等ノ間ニ官線ヲ沈布セサルヘシ且  
トモ若シ此海底線ニ關係ヲ有スル他ノ諸政府ヨリ會社ニ與ヘタル  
現行免許狀ノ條款ニヨリ三十箇年ノ延期ヲナスニ於テハ右二十箇  
年ヲ延テ三十箇年ノ年期ヲ讓與スヘシ」ト規定シテ居ル。尙此ノ  
免許ノ全体ニ付テハ何等期間ノ定メガナイ。

モ、又明治三年ノ約定及明治十五年ノ舊免許状ニアツタ會社財産ニ對スル損害賠償請求ノ訴訟ヲ日本裁判所ニ提起スルコト及會社職員ノ日本法律ヲ遵奉スルコトニ關スル規定モ無クナツテ居ルガコレハ其ノ間(明治三十二年)ニ丁抹國ガ日本ニ於テ有シタ治外法權ガ撤廢セラレタコトニ關聯スルモノデアル。

四此ノ大北電信會社ニ與ヘラレタ獨占權ノ期限ハ其ノ後明治三十三年三月二十九日附ヲ以テ三十箇年ニ延長セラレタ事カ、其ノ期間モ大正元年十二月二十七日ヲ以テ終了シタノデ、大正二年八月二十三日附ヲ以テ新免許状ガ附與セラレタ。此イ新免許状ハ明治十五年ノ免許状ノ規定中尙效力ヲ有スルモノヲ骨子トシテ、コレニ政府ト會社トノ間ニ新ニ協定シタル所ガ附加ヘラレテ居ルノデアルガ、此ノ免許状ノ第一條ニ於テ政府ハ會社ガ長崎又ハ其ノ附近ニ陸揚セル其ノ現在海底線四條(即チ長崎上海間二條及長崎浦潮斯徳間二條)ヲ引續キ所有シ且陸線又ヘ地下被覆線ヲ以テ該海底線ヲ在長崎會社ニ接續シ又其ノ海底線ヲ政府ノ電信ト連絡シテ引續キ運用スルノ權利ヲ享有スルコトヲ確認スルト共ニ、在長崎會社局ハ公衆ト直接取引ヲ爲スコトヲ得ザル旨ガ規定セラレテ居ル尙新免許状ニハ明治十五年ノ舊免許状ニアツタ建物及地所ニ付地方ノ規則ヲ守ルベキコト及輸入税ヲ支拂フベキコトニ關スル規定

此ノ大正二年ノ免許狀ニ於テモ免許ノ期間ハ限ラレテ居ナカツタ  
ノデアルガ、其ノ後昭和十五年春ニ至リ舊免許狀ヲ改訂シ同年五  
月四日附ヲ以テ新特許狀ヲ會社ニ賦與スルコトトナリ、其ノ結果  
同年六月一日以降長崎ニ於ケル會社ノ營業權ヲ政府ニ回收スルト  
共ニ、海底線ノ陸揚權ハ暫定的ニ三箇年間繼續セシムルコトトナ  
ツタ。此ノ新特許狀ニ依ル會社海底線ノ陸揚期限ガ去ル四月三十  
日ヲ以テ満了シタコトハ冒頭ニ述ベタ通デアル。

尙我國ニ於ケル大北電信會社ノ歴史上ノ一事件トシテ、同社ニ對  
スル所得稅及營業收益稅賦課問題ガアル。此ノ問題ハ昭和六年以  
來數年ニ亘ツテ爭ハレタノデアルガ、ココニハ其ノ經緯ニ付テノ  
記述ハコレヲ省略スルコトトスル。又同社長崎支社敷地ハ永代  
借地シナツテ居ヲナシアヘガ、昭和十二年五月三十日水代借地割を解消  
するに因丁文原より文書あり、昭和十七年三月三十日永代借地契  
所有权一改シテナシトナリ附記シテ置ク。

外務省

(日本標準規格B5)

REEL No. A-1172

0413

アジア歴史資料センター